

河野哲也著

『じぶんで考えじぶんで話せるこどもを育てる哲学レッスン』

河出書房新社 2018年 初版 256頁 1600円(税別)

日向悠太(立教大学)

本書は2014年に同じ出版社から上梓された『「こども哲学」で対話力と思考力を育てる』(以下、前作)の加筆修正版として書かれたものがある。本書は前作を「全体を組み替えて加筆修正し、さらに読みやすく、誰にも使いやすいものへと全体的に改めたもの」(p.5)であると書いてあるが、その加筆修正箇所はわずかでしかない。しかし、なぜ前作が使いやすいものに改められなければならなかったのか、そこに注目して本書を紹介したい。

そもそも、なぜ本書が誰にも使いやすいものにならなければならなかったか。本書の内容からは離れるが、まずはそれに答える。前作の貢献もあり、現在、こども哲学は着実に日本に浸透している。2018年8月に開催された日本哲学ブラクティクス学会第1回大会では、大学の研究者のみならず、教員やフリーの実践者まで、多岐にわたる参加者が見られた。しかしそのシンポジウムでは、こども哲学の拡がりに対して、こども哲学を行う実践者の現場の困難、何がこども哲学の正しい方法なのかということに対する不安を持っていることが語られた。その多くは哲学について専門的に学んでいない実践者であり、彼らの不安の解消は、こども哲学の普及の重要な課題である。だからこそ、誰でも読んで理解できる読みやすいこども哲学の解説書が要求されるのである。本書は、そのような要求に応えうる修正が加えられている。

つまり、本書には前作の目的であったこども哲学の紹介と、更にそれが専門家ではない実践者に読みやすい形で提供されるというふたつの目的が

ある。以上をふまえ、ここでは加筆修正されたポイントである、1,構成の変更、2,家庭編とお悩み編、の2点を説明する。

まず、構成の変更については、章題の変更と実践編の章の組み替えという修正が加わっている。本書の理論編であるpart1は、心構えについて記す1, 2章、理論や研究史に触れる3, 4, 5章、実践編に接続される6章で構成される。また、実践編のpart2は前作から構成が変更されたため、哲学対話の形式と方法を記す1, 2章、問題解決編の3, 4, 5章、評価とカリキュラムに関する6, 7章となっている。このように、前作からの修正によって、内容が日常的な言葉と知識で構成される前半と専門的な内容に基づく後半と順序付けられている。哲学対話の初学者が徐々に哲学対話にオンボーディングされるためのケアがここに見られる。

2点目の家庭編とお悩み編については、本書が対象とする「誰にも」の中に、保護者や不慣れた実践者を含むということを明らかにしている。本書は、こども哲学を行っている実践者がスキルを高めるためのものではなく、全く経験のない実践者や対話をうまく深められない実践者が読んでこれからこども哲学をはじめたり、問題を解決するために用いる図書である。実践編の構成の中で学校カリキュラムの話題を最後に回したのも、この点から、読者を学校関係者に限定しないための意図的な修正であると考えられる。1点目も同様であるが、実践上の問題を抱えた際に本書のどこを参考すればよいか、わかりやすくなっている。

本書は、すでにこども哲学を知っている読者には物足りないものだが、こども哲学を広めたいと考え、前作を読んだ読者にとっては、自ら読むものではなく、人に薦めるための図書として大いに役に立つだろう。本書がこども哲学を教育の場に広めるメディアの役割を持つことに期待したい。

参考文献

河野哲也著『「こども哲学」で対話力と思考力を育てる』河出ブックス, 2014年。